

令和5年度 教育事業報告書



独立行政法人 国立青少年教育振興機構



National Aso Youth Friendship Center

国立阿蘇青少年交流の家

はじめに

(独) 国立青少年教育振興機構
国立阿蘇青少年交流の家
所 長 牛田卓也

当所は、世界最大級のカルデラを有し、ユネスコ世界ジオパークにも認定されている阿蘇の雄大な自然の中に立地しています。所の周囲には野焼き等を行うことで人々の手により千年にわたって守り継がれてきた壮大な草原が広がっており、阿蘇の山々を背景に草をはむ牛たちの姿を目にすることができます。そのような当所の歴史は古く、昭和39年、国立中央青年の家に次ぐ我が国2番目の国立青年の家として開所しました。その後、平成18年4月からは、国立青年の家、国立少年自然の家及び国立オリンピック記念青少年総合センターの3法人の統合により、「独立行政法人国立青少年教育振興機構」が設立されたことに伴い、「国立阿蘇青少年交流の家」として新たなスタートをきりました。そして令和6年度には開所から60年の節目を迎えます。

さて、我が国においては、少子高齢化、情報化、グローバル化が進展し、また地域社会においても、核家族化の進行、経済格差の拡大に加え、3年超にわたる新型コロナウイルス感染症の影響などにより人と人とのつながりが希薄化するなど、社会的変革が急速に進んでいます。そのような時代にあって、これからの青少年がこれらの変化を乗り越え、新しい価値を創造する人材として成長するには、自ら考えて、他者と対話・協働し続ける資質・能力を備えていく必要があります。そのためには学校教育だけでなく、学校外での教育や体験を通じた教育が求められおり、当所をはじめとした社会教育機関の果たす役割は大きくなっていると考えます。

当所では、前述のような阿蘇の立地条件を生かすとともに、関係機関等と連携するなどして地域の様々な資源を生かしながら特色のある活動を展開し、生きる力の育成に必要な自然体験活動、集団宿泊活動をはじめ、多様な体験活動の機会の提供に努めているところです。

令和5年度は、5月に新型コロナウイルス感染症が5類に移行しましたが、引き続き感染対策をとりながら、多くの方々・団体に安心して施設を利用していただきました。また、教育事業については、前年度より予算が削減されるなどありましたが、社会の要請に応える体験活動事業、モデル的事业、課題を抱える青少年の支援事業、青少年教育指導者等の養成事業及び地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業など様々な事業を実施しました。この場をお借りしまして本所の事業推進に御協力くださいました関係の皆様には厚く御礼申し上げます。

今般、ここにその報告書を取りまとめることができましたので、関係各位におかれましてはご高覧いただき、忌憚のないご意見・ご指導をいただければ幸いです。

今年度本所では「“阿蘇の宝”を最大限活用し、すべての利用者に最高の『ウェルビーイング』を提供する！」をテーマに掲げ事業推進やサービスの提供に取り組んでまいりました。次年度以降もこの考えのもと職員一丸となってミッションの遂行に力を注ぐ所存です。今後とも支援・ご指導のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

目 次

はじめに	P 1
目次	P 2

第 1 章 令和5年度の教育事業について	P 3
----------------------	-----

第 2 章 令和5年度の教育事業の実際	P 5
---------------------	-----

青少年教育に関するモデル的事业

A S O一周100kmチャレンジキャンプ	P 6
全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」	
・オリエンテーション合宿	P 8
・地域探究プログラム 九州沖縄ブロック地方ステージ	P 10

社会の要請等に応える体験活動等事業

ファミリーキャンプ	P 12
見てみよう！体験してみよう！私の防災	P 14
ジュニアジオガイド講座（全3回）	P 16
子どもゆめ基金助成金募集説明会	P 19
はじめての和太鼓体験	P 21
早寝早起き朝ごはんキャラバン	P 23

課題を抱える青少年を支援する体験活動事業

チャレンジオータムキャンプ	P 26
リアルしか勝たん！おふらいんきゅんぷ2023	P 28
ふるさとを誇りに！Seaサマーキャンプ2023	P 30

青少年教育指導者等の養成及び資質の向上に関する事業

阿蘇ボランティア入門塾	P 32
ボランティア自主企画「アウトドアメシ道場初級」	P 34
あとがき	P 36

事業名 九州・沖縄ブロック地方ステージ

- [主催] 国立阿蘇青少年交流の家
 [後援] 熊本県教育委員会
 [期日] 令和5年12月25日(月)～12月26日(火)(1泊2日)
 [活動場所] 国立阿蘇青少年交流の家
 [参加者] 長崎県立北陽台高校 5名 鹿児島県立鹿児島中央高校 1名 私立樟南高校 1名
 私立志學館高等部 1名 熊本県立阿蘇中央高校 20名
 [評価委員] 二木 信輔 氏(岡山県立玉島商業高等学校 校長)
 豊原 康德 氏(熊本県立教育センター 審議員兼副所長兼教科研修部長)
 牛田 卓也 氏(国立阿蘇青少年交流の家 所長)
 [担当職員] 阿蘇青少年交流の家 3名
 [ボランティア] 2名

1 趣 旨

新学習指導要領に定められた「総合的な探究の時間」の目標等に基づいた研修会を実施するとともに、生徒が地域で行う探究活動を顕彰することで、生徒一人一人が社会の担い手となって、社会の成長につながる新たな価値を創造する人材になることを支援する。

2 目 標

- (1) 参加者8割が、事業全体に「満足」することができる。
- (2) 参加者8割が、プレゼン発表をしたり聞いたりし自身の学びに繋げることができる。
- (3) 出場者の発表を評価・審査し、全国ステージに出場するグループを選出する。

3 事業展開

(1) 研修プログラム

1日目 12月25日(月)		2日目 12月26日(火)	
13:30～14:00	入所式	7:30～ 8:15	朝食
14:00～15:00	シーツ、カギの配付、部屋移動	9:30～ 10:00	開会式
15:00～17:20	発表練習・リハーサル	10:00～12:20	プレゼン発表
17:45～18:30	夕食	12:30～13:15	昼食
18:45～19:30	入浴	13:30～14:30	グループワーク
20:00～22:00	練習・自由時間	14:30～15:30	審査結果発表・閉会式
22:30	就寝	15:30	解散

(2) 活動の様子



【プレゼン発表】



【表彰式】



【講評】



【集合写真】

4 評価、成果と課題

(1) 評価

① 参加者の満足度

設 問	項目	満足	やや満足	やや不満	不満
地方ステージに対する満足度	回答数 (人)	14	14	0	0
	割合 (%)	50.0	50.0	0.0	0.0
プレゼン発表をしたり聞いたりし、自身の学びに繋げることができましたか。	回答数 (人)	24	4	0	0
	割合 (%)	85.7	14.3	0.0	0.0

② 参加者の声

- ・ 良い経験になり様々な人と交流できる機会になった。
- ・ 全体を通して今後の進路などにも活用していき、自分の未来について活かそうと思った。

(2) 成果

- 参加者の8割以上が「プレゼン発表をしたり聞いたりし自身の学びに繋げることができた」と回答した。「他の班の発表、質疑応答を聞いて自分の班の活動をもって深められると思った。」等の記述があり、自身の探究活動を振り返る良い機会になった。
- 他県からの参加者の感想に「他県の生徒との交流が楽しかったし、学ぶことがたくさんあった」、「他校の発表を聴くことで、意識も新たに芽生えた」等の記述があった。集合開催での交流をとおして、参加者がお互いに学び合ったり、協働して取り組むことができたりした。

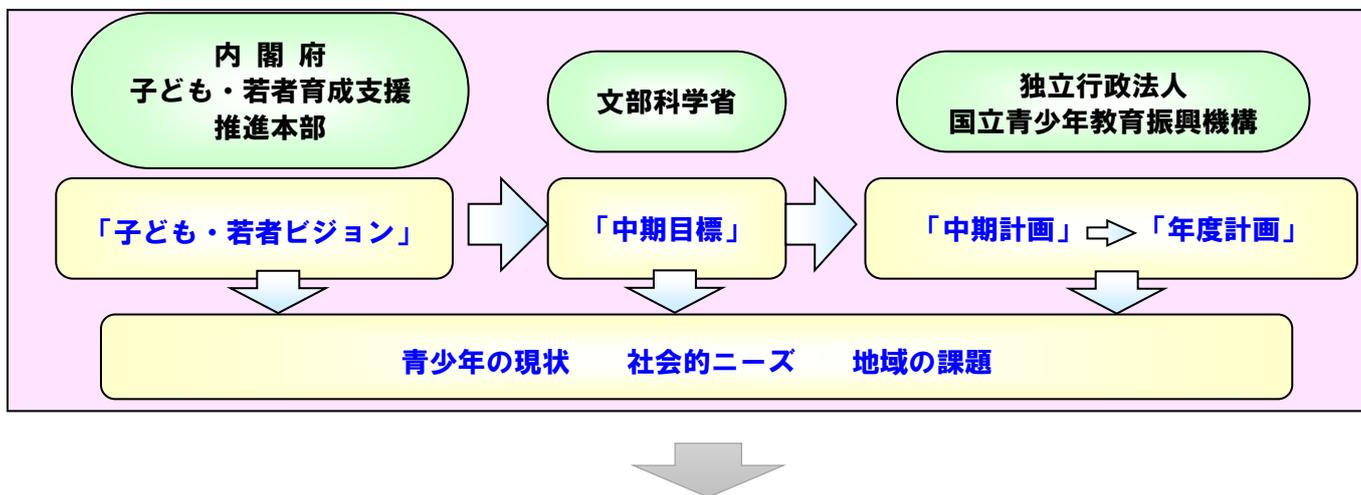
(3) 課題

- 阿蘇の代表グループは、2日目のみの参加であったため、他校との交流があまりできなかったこともあり、地方ステージに対する満足度が低かったと考える。学校型でなく個人型での参加であると2日間の参加が可能となり、他の参加者との交流も深まり満足度も高まると考える。
- 評価委員の講評にもあったが、多くの参加グループが実践活動から新たな課題を見つけているので、その課題を解決するための実践活動を行うと、探究活動がさらに深まる。そのためにも、参加者及び高校との連携の在り方を再度熟考し、参加者の探究活動を支援できるようにする必要がある。

令和 5 年度の教育事業について

第1章 令和5年度の教育事業について

令和5年度の教育事業においては、国の青少年教育行政の基本方針及び第4期中期目標・中期計画、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、更に学校や地域との連携を進める中で、「体験の風をおこそう」運動をより一層推進するとともに、事業の重点化と普及を図ってきました。また、「阿蘇市自然体験活動推進条例」や「機構活性化プラン」、「今後の青少年の体験活動の推進について（答申）」及び「子供の貧困対策に関する大綱」等に伴う事業を実施し、施設の独自性を打ち出した取組を行ってまいりました。



令和5年度 国立阿蘇青少年交流の家教育事業の柱

1 青少年教育に関するモデル的事業

関係機関・団体や国公立青少年教育施設、大学の研究者等と連携した上で、報告書を通して広く青少年教育関係者へ発信する。実践研究事業は、本年度テーマを定め、事業のねらいに対応した実践研究を大学の研究者等と協働で行い、青少年のための専門性の高いモデル的体験活動を取り組むことなどに留意して事業を実施し、令和6年度に報告書を作成する。地域の実情を踏まえたプログラム事業（特色化事業）は、企画段階から営家機関・団体等と連携して実施し、青少年のための専門性の高いモデル的体験活動を取り入れ、使用した教材や指導案などの学習方法が活用されるように工夫し、第四期中期目標期間内に冊子の作成やフォーラムなどを開催する。全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」は、連携学校と協議の上、カリキュラム内容に留意しながらオリエンテーション合宿を実施する。

2 社会の要請等に応える体験活動事業

社会の要請に応える体験活動を推進するために、青少年を対象に自己成長や自己実現等を図る教育事業、防災学習や環境学習などのESDに対応した教育事業を実施する。

3 課題を抱える青少年を支援する体験活動事業

基本的な生活習慣の確立や人間関係系勢力などを育成する体験活動事業を、児童養護施設に入所する児童と不登校などの課題を抱える青少年を対象として実施する。

4 青少年教育指導者等の養成及び資質の向上に関する事業

青少年に良質な体験活動の機会と場を提供するためには、質の高い指導者を養成することが必要不可欠である。ナショナルセンターとして、人づくり、つながりづくり、地域づくりという側面に留意した教育事業を展開する。

5 地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業

子供たちの体力低下をはじめ、学力や規範意識の低下、高校生の読書離れが進んでいる傾向が指摘されている中、子供たちの知・徳・体のバランスの取れた成長に大切な様々な体験活動や基本的な生活習慣の重要性を普及するため、青少年教育団体等と連携して「体験の風をおこそう」運動及び「早寝早起き朝ごはん」国民運動を連動させて取り組み、全国各地における体験勝殿機械や場を充実させるとともに、青少年の基本的な生活習慣の確立を目指す。

令和 5 年度の教育事業の実際

事業名 ASO一周100kmチャレンジキャンプ

- [主催] 国立阿蘇青少年交流の家
- [後援] 熊本県教育委員会 阿蘇郡市各教育委員会
- [期日] 令和5年8月6日(日)～12日(土) 【6泊7日】
事前説明会 令和5年7月30日(日)
- [活動場所] 国立阿蘇青少年交流の家及び阿蘇各地
- [参加者] 22名(小学生14名、中学生8名)
- [担当職員] 阿蘇青少年交流の家6名
- [関係団体] 南阿蘇ファームキャンプ
- [ボランティア] 法人ボランティア5名、熊本大学社会教育演習生5名

1 趣旨

自然環境に恵まれた「阿蘇」の大地をフィールドとして、100kmの長距離ハイキングやキャンプ活動等を通して、同じ目的をもった仲間とともに困難に挑戦し、最後までやり遂げる力を育むとともに他者への思いやりや積極性などの自立的行動習慣を身に付ける。

2 目標

- (1) 参加者8割が、最後までやり遂げる力が身についたと答えることができる。
- (2) 参加者8割が、友達と仲良くなり、思いやりをもった行動ができたと答えることができる。

3 事業展開

(1) 研修プログラム

期日	行 程	宿泊場所	距離(km)
1日目 8・6 日曜日	第1話「阿蘇始まりの地へ」 9:30 10:00 11:00 12:00 15:30 16:00 21:30 受付 開会式 出発 阿蘇神社 小嵐山 入浴 夕食 就寝	交流の家	10.4
2日目 8・7 月曜日	第2話「大観峰での誓い」 5:00 7:00 10:00 12:00 15:00 16:00 21:30 起床 ふれあい水辺公園 大観峰 木落牧野入口 小嵐山 入浴 夕食 就寝	交流の家	18
3日目 8・8 火曜日	第3話「立野からのメッセージ」 5:00 7:15 9:00 11:30 15:30 16:00 21:30 起床 水辺ふれあい公園 産神社 どんどの湯 あぞみヶ池公園 入浴 夕食 就寝	交流の家	19
4日目 8・9 水曜日	第4話「vs阿蘇五岳」 6:00 チームビルディング 室内を歩こう 16:00 21:30 起床 入浴 夕食 就寝	交流の家	3
5日目 8・10 木曜日	第5話「澄んだ水のように」 6:00 8:45 11:30 15:00 16:30 17:00 21:30 起床 牧場展望所 白水高原駅 明神池 白川水源 白水小 入浴 夕食 就寝	白水小	18
6日目 8・11 金曜日	第6話「最後の難関に向けて」 5:00 8:30 10:00 11:30 14:30 17:00 19:30 21:30 起床 白水小 高森駅 色見保育園 鍋の平 移動 BBQ 入浴 就寝	交流の家	18
7日目 8・12 土曜日	最終話「大草原からの贈り物」 5:00 8:30 9:30 12:00 14:00 15:30 16:30 起床 鍋の平 日ノ尾峠 一の宮公園 交流の家 閉会式 解散		14
※台風6号接近のため、網掛け部分に変更して実施。			100.4

(2) 活動の様子



【事前説明会】



【1日目 移動風景】



【2日目 体育館でテント泊】



【4日目 チームビルディング】



【5日目 水源にて】



【7日目 ゴール風景】

4 評価、成果と課題

(1) 評価

① 参加者の満足度

設 問	項目	満足	やや満足	やや不満	不満
キャンプ全体を通しての満足度はどれくらいですか。	回答数 (人)	22	0	0	0
	割合 (%)	100.0	0.0	0.0	0.0
あきらめないで最後まで頑張りぬこうという気持ちをこれまでよりも持てるようになりましたか。	回答数 (人)	22	0	0	0
	割合 (%)	100.0	0.0	0.0	0.0
思いやりをもって友達に接することが、これまでよりもできるようになりましたか。	回答数 (人)	20	1	1	0
	割合 (%)	90.9	4.5	4.5	0.0

② 参加者の声

- ・ キャンプをとおして身についた「つらくても頑張る心」と「行動力」をこれからの生活で生かしていきたい。
- ・ 100km を歩くうえで色々つらい時があった。それでも頑張ることができて、気持ちの面で強くなったと思う。
- ・ きつい時に班のメンバーと声をかけながら歩くことができた。それが支えになったか分からないが、思いやりをもって行動できた。
- ・ とても長くて充実した1週間だった。色んなことがあったがとても楽しかった。

(2) 成果

- 法人ボランティアを班に2名配置することで、100kmの行程中の安全指導が行き届いた。
また、参加者に対してもコミュニケーションの取り方など細かいところまで指導が行き届き、班のメンバー同士のコミュニケーションやチームワークが向上した。
- 台風の影響により室内での活動に変更した際、参加者から「チームみんなで100kmを歩きたい」という声があがった。館内を歩いたり、行程を変更して距離を確保したりといった工夫をしながら目標の100kmを踏破することができ、満足度100%を得ることができた。
- 阿蘇医療センター連携し、専門的なアドバイスを得ることができ、熱中症や感染症対策について、事前説明会や職員・ボランティア研修に生かすことで、全員無事にゴールできた。

(3) 課題

- 天候不良時の対策は行っていたが、台風の接近により臨機応変に対応することが多かった。情報収集や態度決定、コースの下見など参加者の安全面の確保のために実施した事項を次年度に引き継ぎを行う。
- 大学の試験や集中講義により、期間中のボランティア確保が難しかったため、事業期日やボランティア募集の仕方を検討する必要がある。

事業名 オリエンテーション合宿 1年生

- [主催] 国立阿蘇青少年交流の家
 [後援] 熊本県教育委員会
 [期日] 令和5年4月26日(水)～令和6年3月29日(金)
 [活動場所] 国立阿蘇青少年交流の家
 [参加者] 阿蘇中央高等学校 普通科・総合ビジネス科 1年生 70名
 [協力団体] 阿蘇ジオパーク推進協議会 事務局長 永田 紘樹 氏
 WakuWaku Office あそ Be 隊 隊長 薄井 良文 氏
 桜プランニング 代表 渡邊 裕介 氏
 阿蘇門前町商店街振興協会 理事 岩永 芳幸 氏
 阿蘇ジオパークガイド協会 児玉 史郎 氏
 阿蘇グリーンストック 木部 直美 氏
 [担当職員] 1名

1. 趣旨

新学習指導要領に定められた「総合的な探究の時間」の目標等に基づいた研修会を実施するとともに、生徒が地域で行う探究活動を顕彰することで、生徒一人一人が社会の担い手となって社会の成長につながる新たな価値を創造する人材になることを支援する。

2. 事業展開

(1) 研修プログラム

	科目名	実施日
1	ガイダンス	4月26日
2	ワークショップ・講話等「地域づくりの理解と課題設定の基礎」	5月17日～5月18日
3	講義・演習①「地域づくりと研究」	6月21日
4	発表①	7月12日
5	講義・演習②「地域課題の探究」	9月13日
6	発表②	11月22日
7	実践活動のためのガイダンス	R6年5月実施

(2) 活動の様子



【フィールドワークの様子】



【発表の様子】

3. 成果と課題

(1) 成果

- 様々な分野で活躍する講師陣の話を聞いたり、自分たちでテーマを立てて調べたりする活動をおして、阿蘇のよさやそれをさらに生かすための課題について考える事ができた。

(2) 課題

- 仮説の設定や検証方法の考察等についての見通しをもつことがまだ不十分なので、来年度には地方ステージを意識した支援が必要である。

事業名 ファミリーキャンプ

- [主催] 国立阿蘇青少年交流の家
 [後援] 熊本県教育委員会、阿蘇市教育委員会
 [期日] 令和5年9月9日（土）～9月10日（日）
 [活動場所] 国立阿蘇青少年交流の家
 [参加者] 10家族 34名
 [担当職員] 2名
 [ボランティア] 4名（内1名は社会教育演習生）

1 趣旨

コロナ禍により子供たちの体験活動の機会が減ってしまっていることを踏まえ、家族単位で気軽に参加できるイベントを実施することで、体験活動の機会と場を提供する。

2 目標

- (1) 参加者の8割が、体験活動に満足できたと感じることができる。
 (2) 参加者の8割が、自然を身近に感じることができる。

3 事業展開

(1) 研修プログラム

	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
9月9日（土）								開 会 式	オ リ エ ン テ ー シ ョ ン	テ ン ト 設 営	ロ ー プ ワ ー ク	自 然 散 策	野 外 調 理 た き 火		入 浴	就 寝	

	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
9月10日（日）	起 床	朝 食		タ ー プ 設 営 体 験	テ ン ト 撤 収	ア ン ケ ー ト 記 入											

(2) 活動の様子



【絵本によるオリエンテーション】



【テント設営】



【野外調理】



【タープ設営体験】

4 評価、成果と課題

(1) 評価

①参加者の満足度

- ・ 参加者の 90%が体験活動に満足できたと感じる事ができ目標を達成できた。
(1名やや不満の回答があったが、理由は本人の体調不良によるものであった)
- ・ 参加者の 81%が自然を身近に感じる事ができ目標を達成できた。

②参加者の声

- ・ 過去のファミリーキャンプでは、準備は親子で協力するが片づけについては保護者のみが行う姿が多くみられたが、今回は家族で協力している様子が見られた。

(2) 成果

- 薪をつかった炊飯やテント設営など、はじめての体験を成功体験として楽しく実施することができた。そのため、参加者の 100%が、今後家族でも体験活動をしたいと「思った」「少し思った」と感じる事ができた。
- ロープワークを新たに組み入れて実施したが、ロープワークのスキルだけではなく翌日のタープ設営と組み合わせることで、効果的に実施することができた。
- SNS の登録、発信について 6 家族のフォローを新たに得ることができた。

(3) 課題

- 野外調理の際の家族毎の人数差 (2 人家族～7 人家族) を考慮しておらず、終了時間に最大で 45 分程度差が生じてしまった。大家族にはフォローができる体制をつくるためにも、スタッフは、参加者と異なるメニューで対応する必要がある。

事業名 見てみよう！体験してみよう！私の防災

- [主催] 国立阿蘇青少年交流の家
 [後援] 熊本県教育委員会 阿蘇市教育委員会
 [期日] 令和5年12月9日(土)～12月10日(日)
 [活動場所] 国立阿蘇青少年交流の家
 [参加者] 25名〔高校生15名(女10名、男5名) 中学生10名(女3名、男7名)〕
 [講師] 竹内裕希子氏 (国立大学法人熊本大学 教授)
 永田紘樹氏 (阿蘇ジオパーク推進協議会事務局 事務局長)
 坂本昂陽氏 (me-life 代表)
 [担当職員] 4名
 [ボランティア] 4名(内1名は社会教育演習生)

1 趣旨

自然災害発生時の被害(二次被害を含む)を最小限にとどめるための方策(減災)についての知識を身に付けさせる。また、災害に関する各種の学びや体験の場を設定することで社会を支える一員としての自覚を高め、次世代の防災リーダー・災害ボランティアなどの活動への第一歩につなげる

2 目標

- 事後アンケートにより、参加者の8割が事業について「満足」と回答する。
- 事後アンケートにより、参加者の8割が災害時、災害後の自分の役割についての知識が「身についた」と回答する。
- 事後アンケートにより、参加者の8割が災害時、災害後の自身の役割や行動について「どのような行動・活動ができるか」を具体的にイメージして回答することができる。

3 事業展開

(1) 研修プログラム

時刻	令和5年12月9日(土)(1日目)	時刻	令和5年12月10日(日)(2日目)
10:00	受付 @3Fロビー	6:30	起床(6:30)
10:10	開会式 @1-3研修室 オリエンテーション		洗面・身じたく・部屋掃除
10:25	移動	7:30	朝食・準備
11:20	【見学】 震災遺構を通して災害を学ぶ (熊本地震震災ミュージアムKIOKU) 活動①	8:15	荷物移動・部屋点検
12:50	昼食(弁当)	8:45	諸連絡 @中研修室
13:10	移動	9:00	【講話・演習】 自分でできることを考えよう① (避難セットを自分でそろえてみよう) 活動⑤
14:00	【体験】 チームでの活動を通し、避難時に大切なことに気づく (チームビルディング・ブラインドウォーク等) 活動②	10:30	【講話・交流】 自分でできることを考えてみよう② (同世代の仲間とできることを考える) 活動⑥
15:10	【講話・演習】 避難者の多様性を知る (女性、外国人、高齢者、宗教等について) 活動③	12:10	昼食
15:30	移動	12:15	全体の振り返り
16:30	【体験】 野外調理・交流 活動④	13:30	閉会式 @中研修室
17:00	移動	14:00	解散(14:30予定)
20:00	移動		
21:00	入浴		
22:00	就寝準備など		
22:30	消灯(22:30)		

(2) 活動の様子



【見学：熊本地震ミュージアム】



【体験：チームビルディング】



【体験：野外調理】



【講話・演習：自分でできることを考えよう①】

4 評価、成果と課題

(1) 評価

①参加者の満足度

設 問	項目	満足	やや満足	やや不満	不満
「見てみよう！体験してみよう！私の防災」の内容に満足できましたか。	回答数(人)	25	0	0	0
	割合(%)	100	0	0	0
防災、減災についての知識や技能が身につきましたか。	回答数(人)	18	7	0	0
	割合(%)	72	18	0	0
地震の役割や行動について「自分でできること」を具体的にイメージすることはできましたか。	回答数(人)	17	8	0	0
	割合(%)	68	32	0	0

②参加者の声

- ・ 日本は地震が多いから防災・減災についてしっかり考えることが大事だと思った。災害が起きたら自分だけでなく、助け合って皆で乗り切りたい。
- ・ 同世代の人が防災（ボランティア）に関わっていることに感動し、自分自身もできることを見つけて行動に移したいと強く感じた。
- ・ 二日間協力して、目標を達成し、自分の将来への一歩を踏み出したのではないかと思った。たくさんの知識を得ることができたので、周りの人にも教えることができたらいと思った。

(2) 成果

- 参加者全員が事業に満足できたと回答し、また「自分でできること」を具体的にイメージすることができたと回答している。
- 子供たち同士だけでなく、講師やボランティア、スタッフとの交流する場を設定したので、「自分でできること」をどのように実現すればいいのか講師とディスカッションしたり、防災だけでなく進路や大学、高校について相談したり参加者同士で積極的に交流する姿が見られた。
- 同じ高校から友達と参加した学生は事業後に所属校で防災の企画の実施に向けて計画を始め、防災リーダーとして一歩を歩み始めている。

(3) 課題

- 今回の野外調理や交流の時間帯はそれほど気温が低くならなかったが、計画の段階から防寒対策など苦慮した。野外調理を企画する場合、開催時期の検討も必要と感じた。

事業名 ジュニアジオガイド講座（全3回）

[主催]	国立阿蘇青少年交流の家
[共催]	環境省阿蘇くじゅう国立公園管理事務所 阿蘇ジオパーク推進協議会 阿蘇火山博物館
[後援]	熊本県教育委員会 阿蘇市教育委員会
[期 日]	第1回 令和5年9月 2日（土）～9月 3日（日）【1泊2日】 第2回 令和5年9月23日（土）～9月24日（日）【1泊2日】 第3回 令和5年9月30日（土）～10月1日（日）【1泊2日】
	全て同じ参加者
[活動場所]	国立阿蘇青少年交流の家及び阿蘇の草原
[参加者]	小学5年生・6年生 18名
[講師]	第1回 永田 紘樹 氏（阿蘇ジオパーク推進協議会 事務局長） 薄井 良文 氏（WakuWakuOFFICE あそ Be 隊 隊長） 市原 啓吉 氏（町古閑牧野 組合長） 第2回 山下 淳一 氏（阿蘇くじゅう国立公園管理事務所 国立公園保護管理企画官） 飯田 映美 氏（阿蘇くじゅう国立公園管理事務所 レンジャー） 木部 直美 氏（阿蘇グリーンストック 環境教育チーム） 第3回 久保 堯之 氏（みなみあそ観光局 戦略統括マネージャー）
[アドバイザー]	全3回 渡邊 裕介 氏（阿蘇ジオパーク推進協議会 次長） 高嶋 信雄 氏（阿蘇ジオパークガイド協会）
[担当職員]	阿蘇青少年交流の家5名 法人ボランティア4名

1 趣 旨

阿蘇の草原を教材として活用することで、自然を愛する心情を育成する。また、問題解決学習をとおして、科学的思考力と課題解決能力、自ら学ぶ意欲を育成する。さらに、学んだ事を基に草原の役割や重要性について発信することで、豊かな表現力を育成する。

2 目 標

- (1) 参加者の8割が探究活動に「満足」を感じることができる。
- (2) 参加者の8割が草原の役割や保全についてわかり、その重要性について実感することができる。
- (3) 参加者の8割が多様な他者との関りについて、そのよさを実感することができる。

3 事業展開

(1) 研修プログラム

【第1回】9月 2日（土）～9月 3日（日）「阿蘇の歴史と観光」

活動内容：草原トレッキング／草原ビンゴ／中岳火口見学／古坊中草原散策
講 話：阿蘇ジオパークについて

【第2回】9月23日（土）～9月24日（日）「草原と生き物」

活動内容：杵島岳登山／阿蘇山上ビジターセンター／草千里ヶ浜／大観峰
講 話：草原と水の関係について／阿蘇の暮らしと草原について

【第3回】9月30日(土)～10月1日(日)「草原の重要性」

活動内容：熊本地震震災ミュージアム見学／擬似野焼き体験／大観峰

講 話：震災と草原の関係について

(2) 活動の様子

【第1回】



【草原トレッキングの様子】

【第2回】



【杵島岳の山頂】

【第3回】



【震災ミュージアムでの説明】



【草原ビンゴの説明】



【草千里ヶ浜での説明】



【擬似野焼き体験の様子】



【古坊中散策の様子】



【大観峰での説明】



【大観峰ガイド案内】

4 評価、成果と課題

(1) 評価

①参加者の満足度

設 問	項目	満足	やや満足	やや不満	不満
「草原の重要性」について考える事ができましたか	回答数(人)	14	4	0	0
	割合(%)	78	22	0	0
草原の大切さを伝えるために、大観峰ガイド案内で自分の思いを伝えられましたか。	回答数(人)	16	2	0	0
	割合(%)	89	11	0	0
多くに人達との対話から、草原について重要なことを学ぶことができましたか。	回答数(人)	15	3	0	0
	割合(%)	84	16	0	0

②参加者の声

- ・ 阿蘇の自然や草原、野焼きについて多くの人達に伝えていきたい。
- ・ 阿蘇の草原は野焼きをして守られていることを知り、また、100年前より草原が減っているので、野焼きをして草原が減らないようにしていきたいと思った。
- ・ 阿蘇の自然を楽しみ、伝え、多くの人達に阿蘇の草原について興味を持ってもらいたい。

(2) 成果

- 草原の役割や重要性、保全について大観峰でガイド案内を行う際、阿蘇の草原の下にある黒墨土を顕微鏡で見せたり、草原の特徴を紙芝居にして物語にしたりして、今まで学んできたことを工夫して多くの人達に伝えることができた。
- 阿蘇ジオパーク推進協議会と連携しプログラム編成を行ったことで、草原に特化した活動を提供することができた。また、全3回の活動全てにアドバイザーとして帯同してもらったことにより、子供中心の活動を行うことができたり、活動中の子供達から出された細かな疑問や気づきに迅速に対応することができたりした。
- 法人ボランティアに対して事前研修を行うことで、「事業の目的」「育てたい児童の姿」「児童に必要な支援は何か」などを共通理解することができた。事業当日にはそれがうまく作用し、法人ボランティアがねらいを明確にして児童のサポートを行うことができた。そのことから、法人ボランティア育成の点からも成果を挙げることができた。

(3) 課題

- 今年度は、ジュニアジオガイド講座に応募してきた児童の人数が昨年度よりも少なかった。小学校の運動会シーズンと丁度重なるため、実施時期について再考する必要がある。
- 野外での探究活動がメインになるので、雨天時の活動についての代替案が難しい。小雨なら実施可能だが、大雨時には延期で対応したとしても、延期日も大雨が降ればガイド案内が難しくなる。

事業名 子どもゆめ基金助成金募集説明会

[主催] 国立阿蘇青少年交流の家（企画・運営：熊本「体験の風をおこそう」運動実行委員会）

[期 日] 大分会場 ： 令和5年10月13日（金）

熊本会場 ： 令和5年10月23日（月）

[活動場所] 大分会場 ： J:com ホルトホール大分2階セミナールームL・S

熊本会場 ： くまもと県民交流館パレア 9階会議室4

[参加者] 熊本会場 ： 11団体 13名

大分会場 ： 5団体 6名

[担当職員] 2名

1 趣 旨

子供達に様々な体験活動を提供している民間団体等に、子どもゆめ基金についての説明会を開催することで、子どもゆめ基金を活用した体験活動の機会を増やし、より多くの子供達に体験活動を提供することに寄与する。

2 目 標

- (1) 子どもゆめ基金部からの詳しい説明により、子どもゆめ基金の概要や申請書等の留意点を理解する。
- (2) 質疑応答や個別相談の時間を設けることで、団体等の関係者の疑問点を解消し、今後の円滑な応募手続きを進める。
- (3) 子どもゆめ基金を活用した体験活動の機会を増やし、より多くの子供達に体験活動を提供する。（機構として取り組む「子供の貧困対策」を含む。）

3 事業展開

(1) 研修プログラム

	13:00		14:00		15:00		16:00	
各回共通	受	開	全	全	閉	個		
	付	会	体	体	会	別		
			説	質		質		
			明	問		問		

(2) 活動の様子



【大分会場】



【熊本会場】

4 成果と課題

(1) 成果

- 本事業の参加者の満足度は81%であった。また参加した方からは、「申請の仕方が確認できたことがよかった」との声もあった。
- 子どもゆめ基金助成活動の実施にあたっては、当施設を活用した活動を展開してもらえるよう施設紹介の動画を視聴していただくことができ、92%の参加者が当施設の活用を希望または、検討したいとの声があり、1団体は実際に施設への問い合わせがあった。
- 子供の貧困対策として、熊本県及び大分県内の児童養護施設・母子生活支援施設にも広報したところ、過去最大の6園からの参加申込があった。今後、当施設の利用を積極的にPRすることとした。

(2) 課題

- 助成課職員による活動の具体例の説明が不足しており、初参加の団体には助成対象の活動のイメージが膨らみにくかったとの意見があった。(本部へ情報共有)

事業名 はじめての和太鼓体験

[主催]	国立阿蘇青少年交流の家
[後援]	熊本県教育委員会 阿蘇市教育委員会、日本太鼓財団熊本県支部
[期日]	令和5年11月25日(土)～11月26日(日)【1泊2日】
[活動場所]	国立阿蘇青少年交流の家
[参加者]	小学3年生・4年生 22名
[講師]	・夢源(2名) ・南阿蘇太鼓(6名)
[担当職員]	3名
[ボランティア]	3名

1 趣旨

日本の伝統文化である「和太鼓」を体験することで、和太鼓に親しむとともに、共に奏でることの喜びや、2日間の成果を発表することで達成感を味わう。

2 目標

- (1) 参加者8割が、楽しく活動できたと感じることができる。
- (2) 参加者8割が、仲間と演奏することへの喜びを感じることができる。

3 事業展開

(1) 研修プログラム

11月25日(土)	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:30	14:00	15:00	16:30	17:00	17:30	19:00	20:00	21:00	22:00
								オープニング	和太鼓体験		サリエンテーション	夕べのつどい	夕食	和太鼓体験		入浴	就寝

11月26日(日)	6:30	7:15	7:30	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	14:30	15:00	15:30
	起床	朝のつどい	朝食	和太鼓体験		昼食	最終リハーサル	成果発表	ふりかえり	クロージング	解散	

(2) 活動の様子



【オープニングセレモニー】



【和太鼓練習】



【和太鼓練習】



【成果発表】

4 評価、成果と課題

(1) 評価

①参加者の満足度

設 問	項目	満足	やや満足	やや不満	不満
太鼓の体験は楽しかったですか。	回答数(人)	19	3	0	0
	割合(%)	86.4	13.6	0	0
設 問	項目	そう思う	どちらかという、 そう思う	どちらかという、 そう思わない	思わない
また友だちと一緒に太鼓を演奏してみたいと思いますか。	回答数(人)	19	2	0	1
	割合(%)	86.4	9.1	0	4.5

②参加者の声

- ・ まめができるぐらい一生懸命にやって楽しかった。
- ・ 友だちができて楽しかった。はじめて太鼓を打ち、楽しかった。
- ・ 太鼓をたたくといい気持ちになれる。
- ・ せっかくできた友だちと、また演奏したい。

(2) 成果

- 「達成感を味わう」という事業趣旨の背景には、昨年度までの新型コロナウイルスによる、青少年の成果発表の機会の減少を鑑みて、達成感を味わってほしいと願い企画した。そして、成果発表会では、これまで和太鼓を習ったことがない小学3・4年生が1曲約4分もの演奏を2曲披露し、達成感を味わう機会を創出することができた。
- 参加者の中には、親元を離れて宿泊する体験の機会が少ない参加者もあり、和太鼓体験だけでなく、宿泊体験としても参加者に自信をつける機会となった。また、自分の子どもが一人で宿泊することを心配していた保護者からは「1日目と2日目で明らかに違う姿を見ることができました」と評価をいただき、子どもたちだけでなく、保護者も自分の子どもに対する自信をつける機会となった。
- 今回、講師を2団体依頼し、全体指導と補助指導とに分けて参加者への指導を行った。指導補助の南阿蘇太鼓には、中学生と高校生に参加していただいた。参加者の年齢に近いロールモデルとして、太鼓の技術習得の促進だけでなく、異学年交流としての機会も創出することができた。
- 当施設において、小学3・4年生を対象とした事業は少なく、法人ボランティアの学生からも「どこまで手助けするか、どこまで自由にさせるかなど自分なりの線引きができた」との感想があり、学生にとっても参加者との関わりが良い経験となった。
- 当施設において、和太鼓体験を中心とした事業は初の試みであり、また、当機構においても極めて事例が少なく、今回の事業が今後の教育事業の参考事例となった。

(3) 課題

- 参加者から「21時まで練習するのは大変だった」と回答があり、対象年齢に対して活動時間を考慮する必要がある。
- 今回、和太鼓体験の事業は当施設初の試みであり、応募数がどの程度集まるか、予想ができなかった。そのため、申込から随時先着順として、申し込みを受け付けた。その結果、申込開始日からわずか、2日で募集定員に達してしまった。本事業は「地域ぐるみで『体験の風をおこそう』運動推進事業」であり、体験活動を普及啓発するという視点においては、申込参加者の地域性等を考慮することができなかった。今後は、先着順ではなく、定員を超えた時は抽選等で各地域から申込者を募る工夫が必要である。

事業名 早寝早起き朝ごはんキャラバンウィーク

[主催] 国立阿蘇青少年交流の家（企画・運営：熊本「体験の風をおこそう」運動実行委員会）

[後援] 熊本県教育委員会 阿蘇市教育委員会

[期 日] 令和6年1月9日（火）～1月19日（金）
※当初の実施期間は1/9（火）～1/26（金）であったが、交流の家職員間での感染症拡大による中止に伴い上記の期間となった。

[活動場所] 参加希望団体の体育館等

[参加者] 6会場で215名

- ① 1月11日（木）阿蘇市立波野小学校 28名
- ② 1月16日（火）南小国町立市原保育園 69名
- ③ 1月17日（水）高森東保育園 17名
- ④ 1月18日（木）南小国町立りんどうヶ丘小学校 21名
- ⑤ 1月19日（金）ちょうよう保育園 54名
- ⑥ 1月19日（金）西原村立河原学校 26名

※当初は小学校5か所、幼稚園・保育園6か所、合計11か所での実施を予定していたが、中止に伴い2校、3園、計412名のキャンセルとなった。

[担当職員] 10名

1 趣 旨

早寝早起き朝ごはんが、健康的な生活及び教育の質を向上させるために必要不可欠であることを理解するとともに、基本的な生活習慣の確立に向けた普及啓発活動として実施する。また、本事業をとおして、交流の家が身近な存在として、多くの方々に利用していただくことができる施設であることを知ってもらう機会とする。

2 目 標

- (1) 参加者の8割が、活動の中で早寝早起きが必要なことであると「とても理解できた」と感じる。
- (2) 参加者の8割が、活動の中で朝ごはんが必要なことであると「とても理解できた」と感じる。

3 事業展開

- (1) 研修プログラム

小学校・保育園・幼稚園を対象に、着ぐるみを使ったパフォーマンスを当所職員で実施し、早寝早起き朝ごはんの大切さを30分程度の演目でアピールした。

- ・早寝早起き朝ごはんの説明
- ・着ぐるみ登場
- ・紙芝居（小学校のみ）
- ・早寝早起き朝ごはんに関する〇×クイズ
- ・「生活習慣リズム感（香川県教委）」の曲に合わせた運動
- ・交流の家利用案内
- ・終わりの挨拶
- ・退場

(2) 活動の様子



【早寝早起き朝ごはんに関する〇×クイズ】



【「生活習慣リズム感（香川県教委）」のダンス】



【「よふかしおにとはやねちゃん」紙芝居の読み聞かせ】



【感想発表】

4 評価、成果と課題

(1) 評価

① 参加者の満足度について

設 問	項目	満足	やや満足	やや不満	不満
参加されての全体的な満足度はいかがですか？	回答数(人)	6.0	0.0	0.0	0.0
	割合(%)	100.0	0.0	0.0	0.0
実施時間についてお尋ねします。	回答数(人)	6.0	0.0	0.0	0.0
	割合(%)	100.0	0.0	0.0	0.0
開催時期についてお尋ねします。	回答数(人)	6.0	0.0	0.0	0.0
	割合(%)	100.0	0.0	0.0	0.0
参加児童、幼児の理解度について。 ※本設問は実施時に専門職の問いかけ に手を挙げることで確認を行った。	項目	とても理解 できた	やや理解 できた	やや理解 できなかった	理解 できなかった
	割合(%)	90.0	10.0	0.0	0.0

- ・アンケートにおいて、引率者全員が本事業に対して「満足」と回答した。
- ・参加者の9割が、早寝早起き朝ごはんが必要なことであると「とても理解できた」と回答した。

② 参加者の声

- ・着ぐるみに大喜びだった。クイズも分かりやすい問題でよかった。
- ・第三者が言うことで、早寝早起き朝ごはんの重要性が園児に伝わった。
- ・子どもたちもとても喜んで参加していたので、授業時間（45分間）をいっぱい使ってもらってもよかった。

(2) 成果

- 参加する全職員に向けて事前リハーサルを行い、内容の流れや道具の使い方の説明を行ったことにより、本番ではスムーズな進行ができた。
- 今年度は、小学校には紙芝居の読み聞かせ、幼稚園・保育園向けにはダンスのロングバージョンを実施したことで、年齢層に応じた内容となり高い満足度を得ることができた。
- プログラムの中で交流の家の紹介時間を設け、家族利用向けのチラシを各学校、園に配布することで、交流の家についての広報に繋がった。

(3) 課題

- 今回、交流の家のイベントや職員研修と日程が重なったことに加えて、交流の家職員間での感染症拡大があり、人員不足であった。次年度以降は、急な人員不足に備えて、着ぐるみを1体に減らすことや、アテンドと司会者が兼務するといった対策を取り、職員の対応人員を削減する必要がある。
- 着ぐるみとハイタッチなどの接触をしたいという希望が多くあったので、次年度は感染症の流行状況を鑑みつつ、本部に着ぐるみへの接触の許可を要請する必要がある。

事業名 チャレンジオータムキャンプ

- [主催] 国立阿蘇青少年交流の家
 [後援] 熊本県教育委員会 阿蘇郡市教育委員会
 [期日] 令和5年10月14日(土)～15日(日) 【1泊2日】
 [活動場所] 国立阿蘇青少年交流の家及び阿蘇各地
 [参加者] 26名(幼児・小学生17名、中学生・高校生9名)
 [担当職員] 阿蘇青少年交流の家4名
 [関係団体] WakuwakuOFFICEあそBe隊、ネイチャーランド
 [ボランティア] 熊本大学社会教育演習生3名

1 趣旨

自然経験や体験の機会が少ない子供たちに、動物とのふれあいやサイクリング等の体験を通して、豊かな人間性と感性を育む。また、青少年教育施設での生活を通して、生活リズムの改善、ルールやマナーの習得、仲間と一緒に過ごす中での協調性や相互理解を深める機会とし、更なる生活力の向上を図る。

2 目標

- (1) 参加者8割が、自然の豊かさを感じることができる。
- (2) 参加者8割が、大自然や動物と触れ合う活動を楽しかったと感じることができる。

3 事業展開

(1) 研修プログラム

月日	曜日	時間帯	プログラム内容
10/14	土	10:40	開会式
		11:30	昼食
		12:30	・アドベンチャーサイクル、ラペリング、ミニトレッキング(中学生・高校生) ・動物ふれあい体験(幼児・小学生)
		16:00	野外調理(カレー)
		19:30	熱気球搭乗体験(翌日強風予想の為に1日目に変更)
		21:00	入浴
		22:00	就寝
10/15	日	6:30	起床
		8:00	朝食・オリエンテーリング(ミニ)
		10:00	閉会式
		10:30	解散

(2) 活動の様子



【草原探索】



【草原活動】



【熱気球搭乗体験】

4 評価、成果と課題

(1) 評価

① 参加者の満足度

設 問	項目	満足	やや満足	やや不満	不満
大自然の豊かさを感じることができましたか。	回答数(人)	26	0	0	0
	割合(%)	100	0	0	0
大自然や動物と触れ合う活動を楽しかったと感じることができましたか。	回答数(人)	25	1	0	0
	割合(%)	96.1	3.9	0	0

※幼児、小学生は口頭でアンケートを実施

② 参加者の声

- ・ 気球搭乗体験が楽しかった。
- ・ 自然がいっぱいで空気がきれいだった。
- ・ すべて今までしたことのないものばかりで最初は不安だったけれど慣れたらできるようになってきてすごく楽しかった。
- ・ いつもできない経験ができて、自分に自信が持てるようになった。

(2) 成果

- 事業を計画する際、W a k u W a k u O F F I C E あそB e 隊隊長の薄井良文氏と阿蘇観光牧場にて事前下見や動線等の確認を行ったことで、参加者にとって安心安全な活動に繋げることができた。
- すべての参加者が、今回の事業に満足し、自然と触れ合うことができたと回答した。
参加した子どもたちのアンケートの多くに、普段体験することができない熱気球搭乗体験やアドベンチャーサイクルを経験できてよかったと多くの子供たちが回答した。
- ラペリング（ロープ降下体験）では最初はケガすることが怖いという理由で体験を渋った子供もいたが、講師の方々の温かい励ましや分かりやすい助言のおかげで実施することができ、結果的に同じ体験を繰り返し実施したり、「楽しい」と講師に伝えたりする姿があった。

(3) 課題

- 事業前にインフルエンザが流行したことに伴い、感染症予防のため幼児・小学生の宿泊が日帰りとなってしまった。また、当日に感染症罹患者や体調不良者が出たため、10名がキャンセルとなった。それに伴い、引率の職員の入れ替わりなど当初の計画からの変更が多くあったので、その対応についても来年度に引継ぎを行う必要がある。

事業名 リアルしか勝たん！おふらいんきゅんぷ 2023

[主催] 国立阿蘇青少年交流の家

[共催] 医療法人横田会 向陽台病院

[後援] 熊本県教育委員会 熊本市教育委員会 阿蘇市教育委員会

[期日] 令和5年9月16日(土)～17日(日) 【1泊2日】

[活動場所] 国立阿蘇青少年交流の家

[参加者] 向陽台病院に入院歴のある児童生徒で、ネット・ゲーム依存に限らず不登校や発達障害などで治療をしている児童生徒及び、通院中の児童生徒 計13名

[担当職員] 阿蘇青少年交流の家3名

[ボランティア] 法人ボランティア3名、熊本大学社会教育演習生4名

1 趣旨

向陽台病院へ通院しているまたは、入院歴のある児童を対象に、治療的な取り組みの一貫として自然体験等の活動を通じた「生活・自立」を支援する取組を行い、子供達の自己肯定感の向上や生活習慣の改善等につながる多様な体験を提供し、自立する力を身に付けることを目指す。

2 目標

- (1) 参加者の8割が、参加して良かったと満足感を得ることができる。
- (2) 参加者(児童)の8割が、安全にかつ安心して取り組むことができたと感じることができる。

3 事業展開

(1) 研修プログラム

1日目 9月16日(土)		2日目 9月17日(日)	
9:00	向陽台病院 集合	6:30	起床・荷物整理
9:30	向陽台病院 発	7:30～9:00	朝食・部屋点検
11:30	阿蘇青少年交流の家 着	9:00～10:00	忍者の森体験
12:00～12:30	開会式	10:00～11:00	レクリエーション・フリータイム
12:30～13:00	アイスブレイク	11:00～12:45	バーベキュー
13:00～14:00	昼食	12:45～13:15	アンケート記入
14:00～17:00	リアル脱出ゲーム	13:15～13:30	閉会式
17:00～18:00	就寝準備(テント設営等)	13:45	阿蘇青少年交流の家 発
18:00～19:00	夕食・休息	15:30	向陽台病院 着 解散
19:00～20:30	ナイトハイク・焚火・星座観察		
20:30～21:30	入浴		
21:30～22:00	就寝準備・就寝		

(2) 活動の様子



【開会式】



【リアル脱出ゲーム①】



【リアル脱出ゲーム②】



【キャンプファイヤー】



【忍者の森体験】



【テント泊】

4 評価、成果と課題

(1) 評価

① 参加者の満足度

設 問	項目	満足	やや満足	やや不満	不満
楽しく活動できましたか。	回答数 (人)	12	1	0	0
	割合 (%)	92.3	7.7	0.0	0.0
安心して過ごすことができましたか。	回答数 (人)	10	3	0	0
	割合 (%)	76.9	23.1	0.0	0.0
また参加したいですか。	回答数 (人)	10	3	0	0
	割合 (%)	76.9	23.1	0.0	0.0

② 参加者の声

- ・ 二人一組でする運動をしてみたいです。オフラインでも楽しくできて良い時間でした。
- ・ 次はカレー作りをしたいです。ボランティアのお姉さんと遊べて良かったです。

(2) 成果

- 事前に向陽台病院とオンライン会議を通して入念に打ち合わせを重ねた。また、参加者に対する事前説明会を向陽台病院で行う際、職員のみならず法人ボランティアや社会教育演習生も参加し、事前に研修や参加者との交流を行うことができ、全員が安心して当日を迎えることができた。
- 向陽台病院職員に対するアンケートにおいて、「当事業が有意義であったか」という設問に対して「有意義だった」と答えた方が93%だった。また、「来年度も継続して実施したい」と答えた方が93%おり、今後も日数や内容等を検討のうえ、継続していくことが望ましい。
- 「リアル脱出ゲーム」については、向陽台病院職員と法人ボランティアと共にオンラインでミーティングをする等、協働して準備をした結果、多くの参加者が楽しかったと答えた。

(3) 課題

- テントで宿泊した参加者の中に、一睡もできなかつたり睡眠不足になったりした参加者がいた。その結果、「安心して過ごすことができた」の満足度が低かったので、次年度は宿泊日数を増やすのであれば、今年度同様、宿泊場所を選ぶ配慮を行ったり早めの就寝を促したりする必要がある。
- 当事業の趣旨にもある自己肯定感の向上や生活習慣の改善につなげるためには、宿泊日数を増やすと同時に、自己決定や自己解決、協働する場面を取り入れる等の工夫が必要である。

事業区分 地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業
(熊本県国公立青少年社会教育施設連携事業)

事業名 ふるさとを誇りに！Sea サマーキャンプ2023

- [主催] 国立阿蘇青少年交流の家(企画・運営:熊本「体験の風をおこそう」運動実行委員会)
[共催] 熊本県立あしきた青少年の家
[後援] 熊本県教育委員会 球磨村教育委員会
[期日] 令和5年7月15日(土)～16日(日) 【1泊2日】
[活動場所] 熊本県立あしきた青少年の家
[参加者] 球磨村立一勝地小学校、渡小学校の4～6年生 計15名
[担当職員] 阿蘇青少年交流の家3名
[ボランティア] 法人ボランティア2名、熊本大学社会教育演習生4名

1 趣旨

- (1) 令和2年7月の人吉・球磨豪雨災害で被害が大きかった地域の児童に、海を舞台とした体験活動を提供することで、心身のリフレッシュを図る。
- (2) 海と山のつながりを感じさせるような活動を取り入れることで、自分たちが住む地域のよさに気付いたり、自然と人のつながりや自然の大切さを学んだりする。
- (3) 協力する活動を行うことで学校や学年等に関係なく交流し、更につながりを強くする機会とする。

2 目標

- (1) 参加者8割が、楽しく活動できたと感じることができる。
- (2) 参加者8割が、山と海のとつながりが分かり、ふるさとにある自然の大切さについて考えることができる。
- (3) 参加者8割が、友だちと協力できたり、交流できたりしたと感じることができる。

3 事業展開

- (1) 研修プログラム

1日目 7月15日(土)		2日目 7月16日(日)	
10:10～10:40	開会式	7:00～7:30	朝のつどい
10:50～11:50	アイスブレイク	7:30～8:15	朝食
12:00～12:45	昼食	8:15～9:00	宿泊室の清掃・退所点検
13:00～15:30	着替え、準備、移動 砂浜あそび、流木ひろい	9:00～12:00	海水浴
		12:00～12:45	昼食・休憩
15:30～16:00	移動、着替え、休憩	13:00～13:15	アンケート記入
16:00～17:00	流木ストラップづくり	13:15～13:30	閉会式
17:00～17:30	休憩	13:45	あしきた青少年の家 発
17:30～18:00	夕べのつどい	14:30	球磨中学校着 解散
18:00～19:20	夕食・休息		
19:30～20:30	キャンプファイヤー		
20:45～21:15	入浴		
21:15～22:00	就寝準備・就寝		

- (2) 活動の様子



【アイスブレイク】



【砂浜あそび、流木ひろい】



【流木ストラップづくり】



【キャンプファイヤー】



【海水浴】



【閉会式】

4 評価、成果と課題

(1) 評価

① 参加者の満足度

設 問	項目	満足	やや満足	やや不満	不満
楽しく活動できましたか。	回答数 (人)	13.0	2.0	0.0	0.0
	割合 (%)	87.7	13.3	0.0	0.0
山と海のつながりが分かり、ふるさとにある自然の大切さについて理解できましたか。	回答数 (人)	12.0	3.0	0.0	0.0
	割合 (%)	80.0	20.0	0.0	0.0
友だちと協力できたり、交流できたりしましたか。	回答数 (人)	15.0	0.0	0.0	0.0
	割合 (%)	100.0	0.0	0.0	0.0

② 参加者の声

- ・ 班活動などで、みんなで協力でき楽しかった。
- ・ 砂浜遊びや流木ひろいなどで、シーグラスや流木を拾いストラップを作ることができ楽しかった。また、海水浴などなかなかできないことなので楽しかった。
- ・ キャンプファイヤーでみんなと一緒にゲームをしたことが楽しかった。またやりたい。
- ・ 海には工作ができるようなものがたくさんあることを知った。また森林と海は繋がっていることも初めて知った。

(2) 成果

- 事前にあしきた青少年の家職員とオンライン会議を通して入念に打ち合わせを重ねた。また、県立あしきた青少年の家の活動プログラムを有効活用し、あしきた青少年の家職員を中心として安全指導を行ったことにより全ての活動において安全に実施することができた。
- 参加者が芦北町と球磨村との繋がりを感じられるよう、海と山の繋がりについての話題を各活動前に話したりキャンプファイヤーでは球磨村の木を使ったりしたことにより、海と山との繋がりに気づかせることができた。
- 2校から参加する児童同士の交流を図るために、熊本大学社会教育演習生や法人ボランティアとも事前の打ち合わせを実施し、事業の目的等を共有したり各活動の司会進行やアイスブレイク、キャンプファイヤーのレクリエーション等の役割を任せたりしたことにより、参加者とコミュニケーションを多くとることができ、それが参加者の満足度の高さに繋がった。

(3) 課題

- 事業当日は、あしきた青少年の家でも主催事業を実施しており、あしきた青少年の家の職員の負担にも繋がるので、今後、開催日の設定をする際に充分調整する必要がある。

事業名 阿蘇ボランティア入門塾

- [主催] 国立阿蘇青少年交流の家
 [後援] 熊本県教育委員会
 [期日] 令和5年6月17日(土)～6月18日(日)【1泊2日】
 [活動場所] 国立阿蘇青少年交流の家
 [参加者] 大学生38名 高校生6名 計44名
 [講師] 高見 大介 氏(日本文理大学)
 薄井 良文 氏(WakuWakuOFFICE あそ Be 隊)
 [担当職員] 阿蘇青少年交流の家3名
 [ボランティア] 法人ボランティア3名

1 趣旨

- (1) ボランティア養成研修をとおして、青少年教育施設におけるボランティア活動の基礎を培い、ボランティアとしての態度や能力を育成する。
- (2) 施設職員や先輩ボランティアとの交流を通じて、青少年教育施設におけるボランティア活動の魅力に触れ、法人ボランティアとしての登録と活動への意欲を促す。
- (3) 熊本県内の県立社会教育施設と連携し、ボランティア活動の選択の幅を広げる。

2 目標

- (1) ボランティア入門塾の受講者全員がボランティア登録を行い、今後行われる実際の教育事業等においてボランティア活動に参加する。
- (2) ボランティア入門塾に参加者が主体的に参画し、参加者の8割が本事業に「満足」を感じる。

3 事業展開

- (1) 研修プログラム

1日目 6月17日(土)		2日目 6月18日(日)	
10:30～11:00	開会式	7:15～ 7:30	朝のつどい
11:00～12:00	【講義・演習】ボランティア活動の技術① (アイスブレイクの目的理解)	7:30～ 8:30	朝食
12:00～13:00	昼食	8:30～ 9:00	宿泊室の清掃・退所点検
13:00～15:00	【講義・演習】ボランティア活動の技術② (危険予知トレーニング、刃物と火の取り扱い)	9:00～12:00	【講義・演習】安全管理 講師:薄井良文氏
15:00～15:30	休憩	12:00～13:00	昼食・休憩
15:30～16:30	【講義】青少年施設の現状と運営	13:00～15:00	【講義】青少年教育施設におけるボランティア
16:30～18:00	【講義】ボランティア活動の意義 講師:高見大介氏	15:00～15:30	【講義・演習】ボランティア活動の技術④
18:00～19:00	夕食・休息	15:30～16:00	閉会式
19:00～20:30	【講義】青少年教育	16:00～	解散
20:30～21:00	【講義・演習】ボランティア活動の技術③		
21:00～22:00	入所オリエンテーション・入浴		

- (2) 活動の様子



【演習:アイスブレイクの目的理解】



【演習:危険予知トレーニング】



【演習:刃物の取り扱い】



【講義：ボランティア活動の意義】



【講義：青少年教育】



【演習：安全管理】

4 評価、成果と課題

(1) 評価

① 参加者の満足度（早退等のため 42 名回答）

事業全体をとおしての満足度はどのくらいですか。	項目	満足	やや満足	やや不満	不満
	回答数 (人)	41	1	0	0
	割合 (%)	97.6	2.4	0.0	0.0

② 参加者の声

- ・ 様々な活動を通じて、いろいろな人とコミュニケーションをとることができ、自分自身とても成長したと感ずることができた。
- ・ ボランティア活動に対して、新しい考え方がたくさん身に付いた。
- ・ 同じような志をもつ先輩ボランティアや友達、職員の方々の話を聞き、すごく大切なものを得られたと感じた。
- ・ 久しぶりにたくさんコミュニケーションをとることができた。自分のことを説明し、相手のことを知るといのはとてもよいことだと改めて感じた。

(2) 成果

- 法人ボランティア（先輩ボランティア）が活動している姿や実際のイメージを参加者に理解してもらうよう、本事業の進行や運営等を先輩ボランティアに担ってもらった。これにより、44名の参加者全員が法人ボランティアに登録し、「ふるさとに誇りを！Seaサマーキャンプ」や「ASO一周チャレンジキャンプ」にボランティアとして参加することを希望するなど、ボランティア活動への意欲を高めることができた。
- 今後、ボランティア活動をしていく中で様々な人との関りを持ってもらうために、固定化された班ではなく、カリキュラムごとに班構成を変え、より多くの参加者同士のコミュニケーションを持たせる工夫を行った。これにより、自分の考えを深めたり広げたりすることができた。
- 参加者が阿蘇だけでなく、様々な活躍の機会を持つことができるよう、県内の公立施設と連携し、公立施設の紹介や企画事業、ボランティア活動に関する内容について施設職員からの説明の時間を設けた。今後、阿蘇にのみならず県内公立施設におけるボランティア活動につながる機会を提供することができた。

(3) 課題

- 所定のカリキュラムを行うには、1泊2日のスケジュールではタイトであり、もっと休憩がほしいと感じている参加者もいた。交通機関の関係もあるので、次年度においては、実施期間を2泊3日にしたり、参加者送迎による時間の確保をしたりするなど検討が必要である。

事業名 アウトドアメシ道場 初級

[主催] 国立阿蘇青少年交流の家
 [後援] 熊本県教育委員会、阿蘇市教育委員会、
 [期日] 令和5年11月11日(土)～11月12日(日)【1泊2日】
 [活動場所] 国立阿蘇青少年交流の家
 [参加者] 小学5年生・6年生、中学1年生～3年生 計20名
 [担当職員] 2名
 [ボランティア] 4名

1 趣旨

はじめて出会う仲間と一緒に、アウトドアメシづくりを通して、つくる楽しみや共食の喜びを感じ、食への興味や関心を高める。

2 目標

- (1) 参加者8割が、楽しく活動できたと感じるができる。
- (2) 参加者8割が、仲間と共に食事することへの喜びを感じるができる。

3 事業展開

(1) 研修プログラム

11月11日(土)	10:30	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:30
		開会式	アイスブレイク	昼食			アウトドアメシ (シチュー作り)			星座観察	入浴	就寝

11月12日(日)	6:30	7:15	7:30	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00
	起床	朝のつどい	朝食		アウトドアメシ (ホットドッグ作り)	アウトドアメシ (チーズ、バター、 ドッグ作り)		振り返り	解散

(2) 活動の様子



【アイスブレイク】



【アウトドアメシ (シチューづくり)】



【アウトドアメシ (バターづくり)】



【アウトドアメシ (ホットドッグづくり)】

4 評価、成果と課題

(1) 評価

①参加者の満足度

設 問	項目	満足	やや満足	やや不満	不満
2日間、楽しむことができましたか？	回答数(人)	18	2	0	0
	割合(%)	90.0	10.0	0	0
仲間と一緒に食事をして、楽しかったですか？	回答数(人)	19	1	0	0
	割合(%)	95.0	5.0	0	0

②参加者の声(小・中学生)

- ・ みんなでシチューをつくり友情が広がった。
- ・ 新しい友達ができうれしかった。
- ・ 地元ではみることができないような星座を見ることができて良かった。
- ・ 家でも、バターをつくりたい。

③企画及び運営をした学生スタッフの声

- ・ 目的を意識することで、活動内容一つ一つに根拠を持つことができたので、改めて目的を設定することの重要性を学ぶことができた。
- ・ これまで様々な企画や商品開発に携わったが、メインターゲットを設定しての企画は初めてであり良い学びであった。
- ・ 子供たちと関わり、対等な立場で話すことの重要性に気づくことができた。

(2) 成果

① 参加者(小・中学生)に関して

- 8割以上の参加者が仲間との食事に喜びを感じることができ、2日間の体験活動を終えて新たにチャレンジしてみたい目標を立てることができた。

② 企画した学生に関して

- 学生の感想より、企画づくりを通して3つの学びを提供することができた。一つ目は、「目的の重要性と観察力の大切さ」。二つ目に、「メインターゲットを設定することの重要性」。最後に、「異年齢との関わり方の難しさ」である。このことから、企画づくりの方法を伝えることができただけでなく、企画者本人らや参加者との対話を通して、コミュニケーション能力を醸成することができた。

(3) 課題

① 参加者(小・中学生)に関して

- 冬場ということもあり、バター作りに時間を要した。

② 企画した学生に関して

- 当日の運営は学生スタッフが4人であったため、子供だけの企画を運営する場合、参加者の対応及び、プログラムの進行に人手を割かれ、全体を俯瞰してみる役割を担うことができなかったため、次回以降は運営スタッフを最低5人は募れるよう、努めていきたい。

あとがき

令和2年、国内で新型コロナウイルスの感染者が確認され、令和5年5月ようやく感染症法の位置づけが2類から5類に引き下げられました。

この間、多くの方々に行動や活動に制限が課せられ、青少年に必要な“体験”もその機会を失うこととなり、我々の使命はより重要なものとなりました。

関係団体等の皆さまをはじめ、多くの方にご協力いただきながら、「体験を止めない」覚悟を持って、どうすれば青少年により良い体験を提供できるのか、持続可能な社会を支えていく人材を育成できるのかを考えながら実践し続けてきました。

令和5年度の教育事業におきましては、引き続き、最低限の感染症予防を取り入れながらも、従前のように、青少年同士が対面で話をし、笑い合い、肩を組むといった姿が見られるようになりました。

一方で、青少年を取り巻く様々な課題が多くあります。「誰一人取り残すことなく、全ての青少年に良質な体験を提供すること」がこれまで以上に求められています。

その解決にあたっては、我々職員だけの力では到底難しく、社会的包摂を推進する必要があります。

これまでも皆様から多大なご尽力を賜りましたが、より一層、地域をはじめ各企業、各団体の皆様との連携を強めたいと考える所存です。

令和6年度には開所60周年、節目の年を迎えます。我々のMissionを達成すべく、多様な体験活動を展開していくためにも、皆様の引き続きのご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

独立行政法人 国立青少年教育振興機構



National Aso Youth Friendship Center

国立阿蘇青少年交流の家